

県道太田上町志度線道路改築工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告

太田原高州遺跡 1

2014. 11

香川県教育委員会

序 文

本書には、県道太田上町志度線の改築工事に伴い発掘調査を実施した、香川県高松市太田上町(おおたかみまち)の太田原高州遺跡(おおたはらたかすいせき)の報告を収録しています。

太田原高州遺跡では弥生時代中期の区画墓群や奈良時代の建物などが見つかりました。この時期の区画墓群は香川県内では初めての事例で、墓域の構成状況は当時の社会を復元する手がかりになります。また、埋葬施設から発見された水晶製の玉は全国的にも希少で、京都府の丹後半島付近で製作されたものが高松平野に持ち込まれたと考えられます。

本報告書が、香川県の歴史研究の資料として広く活用され、埋蔵文化財への関心が深められる一助となれば幸いです。

最後になりましたが、発掘調査から出土品の整理・報告にいたるまでの間、関係機関ならびに地元関係各位には多大なご援助とご協力をいただきました。ここに深く感謝申し上げるとともに、今後ともご支援賜りますようお願い申し上げます。

平成 26 年 11 月
香川県埋蔵文化財センター
所長 真鍋 昌宏

例　　言

1 本報告書は、県道太田上町志度線道路改築工事に伴い発掘調査を実施した、香川県高松市太田上町に所在する太田原高州遺跡(おおたはらたかすいせき)2次調査の一部と4次調査の報告である。

2 発掘調査は香川県埋蔵文化財センターが実施した。

3 発掘調査期間と担当者は次のとおりである。

2次調査

期間 平成23年10月1日～平成24年2月10日

担当 文化財専門員 乗松真也

4次調査

期間 平成25年4月1日～5月31日

担当 主任文化財専門員 森下英治、文化財専門員 小野秀幸、技師 真鍋貴匡

4 調査にあたっては次の方々、関係機関の協力を得た。記して謝意を表したい。

荒木幸治、大賀克彦、大久保徹也、大庭重信、川崎保、小山雅人、品川欣也、新谷勝行、高上拓、馬場伸一郎、濱田竜彦、肥後弘幸、藤井整、藤田三郎、米田克彦、若林邦彦、渡邊誠

京丹後市教育委員会、京都府埋蔵文化財調査研究センター、田原本町教育委員会、東京国立博物館、北栄町教育委員会

香川県高松土木事務所、地元自治会、地元水利組合（順不同、敬称略）

5 報告書の作成は香川県埋蔵文化財センターが実施した。執筆・編集は乗松真也が担当した。

6 本報告書で用いる座標系は国土座標第IV系（世界測地系）で、方位の北は国土座標第IV系による。また、標高は東京湾平均海水面を基準とした。

7 遺構は次の略号により表示した。

SH 堅穴建物 SB 掘立柱建物 SP 柱穴・小穴 SK 土坑 SD 溝

SX その他の遺構

8 遺構断面図の水平線上の数値は水平線の標高線（単位m）である。

9 遺構断面図中の注記の色調は小山正忠・竹原秀雄編『新版標準土色帖32版』を参照した。

10 土器観察表の色調は小山正忠・竹原秀雄編『新版標準土色帖32版』を参照した。また、残存率は遺物の固化部分に占める割合であり、完形品に対する割合ではない。

11 遺物の時期は主に次の文献を参照した。

信里芳紀 2005「讃岐地方における弥生中期から後期初頭の土器編年 一凹線文期を中心にしてー」『香川県埋蔵文化財センター研究紀要』1

乗松真也 2006「高松平野における弥生時代後期の土器編年」『調査研究報告』2 香川県歴史博物館
信里芳紀 2002「小谷窯跡出土須恵器の編年」香川県埋蔵文化財調査センター編『高松ファクトリー

パーク造成事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告 小谷窯跡・塚谷古墳』

佐藤竜馬 1993「香川県十瓶山窯跡群における須恵器編年」『関西大学考古学研究室開設40周年記念考古学論叢』

佐藤竜馬 2000「高松平野と周辺地域における中世土器の編年」香川県埋蔵文化財調査センター編『空港跡地整備事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告第4冊 空港跡地遺跡IV』

12 3次調査の図、データは次の文献から引用した。

高上 拓 2013「太田原高州遺跡」香川県教育委員会編『香川県文化財年報 平成23年度』

* 地図は国土地理院地形図を使用しました。

本文目次

第1章 調査に至る経緯と経過.....	1
第1節 調査に至る経緯.....	1
第2節 調査の経過.....	2
第3節 調査体制・整理体制.....	2
第2章 立地と環境.....	4
第1節 地理的環境.....	4
第2節 歴史的環境.....	4
第3章 発掘調査の記録.....	8
第1節 調査の方法.....	8
第2節 基本層序.....	8
第3節 弥生時代の区画墓群と出土遺物.....	13
第4節 区画墓を除く弥生時代の遺構と遺物.....	54
第5節 7世紀の遺構と遺物	55
第6節 古代以降の遺構と遺物.....	61
第4章 自然科学分析.....	69
第1節 太田原高州遺跡における石製玉類の蛍光X線分析及び産地同定.....	69
第2節 太田原高州遺跡の区画墓主体部土壌の蛍光X線元素マッピング分析	73
第3節 太田原高州遺跡の花粉分析.....	76
第4節 自然科学分析に関するコメント	77
第5章 総括.....	78
第1節 区画墓群の構築過程	78
第2節 区画墓群の供獻土器	86
第3節 水晶製算盤玉の搬入	89
第4節 区画墓群の構造と系譜	95

挿図目次

第1図	道路位置図	1
第2図	高松平野における弥生時代中期後葉の遺跡	6
第3図	道路位置図	7
第4図	調査区割図	8
第5図	2-4区西壁・2-3区北壁断面	9
第6図	2-7区南壁・4区東壁断面	10
第7図	4区南壁断面	11
第8図	区画墓群 平面図	12
第9図	区画溝 断面位置	14
第10図	区画溝 断面1	15
第11図	区画溝 断面2	16
第12図	区画溝 断面3	17
第13図	区画溝 断面4	18
第14図	区画溝 断面5	19
第15図	区画溝 断面6	20
第16図	区画溝 断面7	21
第17図	区画溝 断面8	22
第18図	区画溝 断面9	23
第19図	区画溝 a層出土隕	25
第20図	区画溝 b層出土隕	26
第21図	区画溝 c層出土隕	27
第22図	区画墓群 供獻土器出土位置	29
第23図	区画墓1 (SD05) 供獻土器	30
第24図	区画墓1~7 (SD01・02・03・18・07) 供獻土器	31
第25図	区画溝 c層 出土遺物	32
第26図	SD05b層 出土遺物1	33
第27図	SD05b層 出土遺物2	34
第28図	SD05b層 出土遺物3	35
第29図	SD05b層 出土遺物4	36
第30図	SD05b層 出土遺物5	37
第31図	SD05b層 出土遺物6	38
第32図	SD05b層 出土遺物7	39
第33図	SD05b層 出土遺物8	40
第34図	SD01b層 出土遺物9	41
第35図	SD02・03・04・07・18・19・108b層 出土遺物	42
第36図	SD01・02・03・05a層 出土遺物	43
第37図	SD07a層 出土遺物	44
第38図	SD06・16 出土遺物	44
第39図	主体部1-1・主体部1-2 平・断面図	46
第40図	主体部1-3 平・断面図・出土遺物	47
第41図	主体部1-4・主体部3-1 平・断面図	48
第42図	主体部2-1 平・断面図	50
第43図	主体部2-1 断面図・出土遺物	51
第44図	時期別構配賈略図1	52
第45図	時期別構配賈略図2	53
第46図	SB03 平・断面図	54
第47図	SK09 平・断面図・出土遺物	55
第48図	SD101 断面図	56
第49図	SD20・107・109 断面図	56
第50図	SP103・117・118・122・126・128・129 平・断面図・出土遺物	56
第51図	SH01 平・断面図・出土遺物	57
第52図	SB02 平・断面図・出土遺物	58
第53図	SX08 断面図・出土遺物	59
第54図	SD10・11 断面図・出土遺物	59
第55図	SD20 断面図・出土遺物	60
第56図	SX05 平・断面図・出土遺物	60
第57図	SB01 平・断面図・出土遺物	62
第58図	SB01 断面図	63
第59図	SB04 平・断面図	64
第60図	SB05・06 平・断面図	65
第61図	SE07・08 平・断面図	66
第62図	SD15・17 平・断面図	66
第63図	SX01 平・断面図・出土遺物	67
第64図	SX06 平・断面図	67
第65図	古代以降柱穴 断面図	67
第66図	古代包含層・遺構外 出土遺物	68
第67図	測定箇所写真	72
第68図	主体部土壤の実体顕微鏡写真	74
第69図	プレス試料およびケイ素と水銀の元素 マッピング図	75
第70図	区画墓群と供獻土器出土位置	79
第71図	区画墓構築順序	80
第72図	主体部深度比較図	80
第73図	区画墓1・2・6 構築過程模式図	82
第74図	区画墓群構築過程模式図1	84
第75図	区画墓群構築過程模式図2	85
第76図	SD12・13出土供獻土器	86
第77図	広口短頸壺の型式変化	87
第78図	土器組成図	88
第79図	奈具両技法工程図	90
第80図	奈具両技法による水晶製飾盤玉	91
第81図	奈具両技法による水晶製飾盤玉	91
第82図	奈具両道跡・西高江遺跡水晶製玉未成品	91
第83図	水晶算製盤玉のサイズ比較	92
第84図	水晶算製盤玉の流れ	94
第85図	佐古川・深田遺跡と太田原高州道路の区画墓群	96
第86図	備讃瀬戸北岸の集団墓	97
第87図	墓域構成模式図	99

表 目 次

第1表	区画図属性表	13	第13表	土器観察表(1)	107
第2表	主体部属性表	13	第14表	土器観察表(2)	108
第3表	区画溝出土螺鈿往復組成表	28	第15表	土器観察表(3)	109
第4表	太田原高州道路における石材同定結果	70	第16表	土器観察表(4)	110
第5表	太田原高州道路における萤光X線分析結果	71	第17表	土器観察表(5)	111
第6表	分析対象一覧	73	第18表	土器観察表(6)	112
第7表	分析試料一覧表	76	第19表	土器観察表(7)	113
第8表	産出花粉一覧	76	第20表	土器観察表(8)	114
第9表	遺構一覧表(1)	103	第21表	土器観察表(9)	115
第10表	遺構一覧表(2)	104	第22表	土器観察表(10)	116
第11表	遺構一覧表(3)	105	第23表	石器観察表	116
第12表	遺構一覧表(4)	106	第24表	玉鏡観察	116

写 真 目 次

写真 1	区画図1・2・3 東から	117	写真 42	主体部12 北から	132
写真 2	区画図1・3 西から	118	写真 43	主体部1-1 植出状況 北から	133
写真 3	区画図1 東から	119	写真 44	主体部1-1 断面 西から	133
写真 4	主体部2-1 南から	119	写真 45	主体部1-1 断面 北から	133
写真 5	区画図1・2・3 南から	120	写真 46	主体部1-1 断面 北から	134
写真 6	区画図1 西から	120	写真 47	主体部1-1 北西から	134
写真 7	調査前風景 東から	121	写真 48	区画溝断面14(SD03) 西から	134
写真 8	区画溝断面3(SD01) 西から	121	写真 49	区画溝断面18(SD05) 南西から	135
写真 9	SD01調査風景 東から	121	写真 50	区画溝断面16(SD07) 北から	135
写真 10	区画溝断面4(SD01) 南から	122	写真 51	区画溝断面14(SD07) 西から	135
写真 11	SD01供献土器出土状況 西から	122	写真 52	SD05供献土器出土状況 北から	136
写真 12	SD01 繪出土状況 南西から	122	写真 53	SD05供献土器出土状況 北から	136
写真 13	区画溝断面2(SD01) 東から	123	写真 54	SD05供献土器出土状況 北から	136
写真 14	区画溝断面1a(SD01) 南から	123	写真 55	SD05供献土器出土状況 北から	137
写真 15	区画溝断面12 (SD02)断面 北から	123	写真 56	SD03・07 繪出土状況 東から	137
写真 16	SD07a層 領憲器出土状況 東から	124	写真 57	SD06 北西から	137
写真 17	区画溝断面9(SD05) 南東から	124	写真 58	SD06断面 北から	138
写真 18	区画溝断面11(SD03) 南から	124	写真 59	SD07 完掘状況 西から	138
写真 19	区画溝断面34 (SD04) 南東から	125	写真 60	SD03 繪検出状況 西から	138
写真 20	区画溝断面34 (SD04) 北東から	125	写真 61	24区南壁断面 北から	139
写真 21	SD13調査風景 北西から	125	写真 62	区画溝断面32(SD05) 西から	139
写真 22	主体部4-1 北西から	126	写真 63	区画溝断面18(SD05) 南から	139
写真 23	区画図2 北東から	126	写真 64	SD05調査風景 西から	140
写真 24	SD02供献土器出土状況 北から	126	写真 65	SD05層遺物出土状況 南西から	140
写真 25	SD01供献土器出土状況 東から	127	写真 66	区画溝断面24(SD05) 南から	140
写真 26	SD01断面 東から	127	写真 67	SD05断面 南から	141
写真 27	SD05供献土器出土状況 北東から	127	写真 68	区画溝断面28(SD18) 北東から	141
写真 28	主体部2-1 植痕検出状況 南から	128	写真 69	区画溝断面22a(SD05) 西から	141
写真 29	主体部2-1 植痕検出状況 北から	128	写真 70	区画溝断面20(SD16) 北西から	142
写真 30	主体部2-1断面 西から	128	写真 71	区画溝断面19 (SD16) 東から	142
写真 31	主体部2-1断面 西から	129	写真 72	SD05供献土器出土状況 南から	142
写真 32	主体部2-1断面 西から	129	写真 73	区画溝断面21(SD05) 東から	143
写真 33	主体部2-1断面 北から	129	写真 74	区画溝断面22(SD05) 西から	143
写真 34	主体部2-1断面 北から	130	写真 75	SD05供献土器出土状況 南西から	143
写真 35	主体部2-1断面 北から	130	写真 76	区画溝断面28(SD18) 東から	144
写真 36	主体部2-1 南から	130	写真 77	区画溝断面25(SD18) 東から	144
写真 37	25区東壁断面 西から	131	写真 78	SD04断面 南西から	144
写真 38	25区東壁断面 西から	131	写真 79	区画溝断面27(SD18・19) 北から	145
写真 39	主体部1-2 植出状況 南から	131	写真 80	SD18供献土器出土状況 東から	145
写真 40	主体部1-2断面 東から	132	写真 81	SD05・18・19 繪検出状況 東から	145
写真 41	主体部1-2断面 北から	132			

写真 82	区画幕 1 縦検出状況 西から	146
写真 83	区画溝断面 41(SD21) 北から	146
写真 84	区画溝断面 40(SD21) 北西から	146
写真 85	SD16 縦出土状況 北から	147
写真 86	SD18・19 完掘状況 南から	147
写真 87	区画幕 1 東から	147
写真 88	SD19 断面 西から	148
写真 89	区画溝断面 39(SD22) 南から	148
写真 90	SD22 縦出土状況 南東から	148
写真 91	SD05・06 交点部分縦出土状況 南東から	149
写真 92	SD16 南東から	149
写真 93	SD22 南西から	149
写真 94	主体部 1-3 检出状況 北西から	150
写真 95	主体部 1-3 木棺痕跡検出状況 西から	150
写真 96	主体部 1-3 管玉出土状況 北東から	150
写真 97	主体部 1-3 管玉出土状況 北東から	151
写真 98	主体部 1-3 断面 南から	151
写真 99	主体部 1-3 断面 北から	151
写真 100	主体部 1-3 断面 北から	152
写真 101	主体部 1-3 断面 東から	152
写真 102	主体部 1-3 断面 東から	152
写真 103	主体部 1-3 北西から	153
写真 104	主体部 3-1 検出状況 南から	153
写真 105	主体部 3-1 断面 東から	153
写真 106	主体部 3-1 北東から	154
写真 107	主体部 1-4 検出状況 東から	154
写真 108	主体部 1-4 断面 東から	154
写真 109	主体部 1-4 断面 北から	155
写真 110	主体部 1-4 断面 北から	155
写真 111	主体部 1-4 南東から	155
写真 112	4-1 区道構検出状況 西から	156
写真 113	SD108 検出状況 北から	156
写真 114	区画溝断面 43(SD103) 北から	156
写真 115	区画溝断面 42(SD102) 北から	157
写真 116	区画幕 6 東から	157
写真 117	SK09 断面 西から	157
写真 118	SK09 遺物出土状況 西から	158
写真 119	SD101 断面 西から	158
写真 120	SD11 断面 南西から	158
写真 121	SD08 断面 北西から	159
写真 122	SD08 東から	159
写真 123	SD08 須弥器出土状況 西から	159
写真 124	SD11 断面 北東から	160
写真 125	SD11 断面 北から	160
写真 126	SD11 縦出土状況 南西から	160
写真 127	SH01 完掘状況 西から	161
写真 128	SP02-SP15 断面 西から	161
写真 129	SX05 検出状況 北から	161
写真 130	SX05 断面 北から	162
写真 131	SP02 断面 南から	162
写真 132	SB01-SP26 断面 東から	162
写真 133	SB01 東から	163
写真 134	3 区北壁断面 南から	163
写真 135	現地説明会風景	163
写真 136	区画幕群供献土器	164
写真 137	主体部 1-3・2-1 着装品	164
写真 138	出土遺物 1	165
写真 139	出土遺物 2	166
写真 140	出土遺物 3	167
写真 141	出土遺物 4	168
写真 142	出土遺物 5	169
写真 143	出土遺物 6	170

第1章 調査に至る経緯と経過

第1節 調査に至る経緯

県道太田上町志度線道路改築工事に伴い、香川県教育委員会では平成19年度から24年度にかけて香川県高松市太田上町で試掘調査を実施した。その結果、試掘調査対象地のうち5,098m²で弥生～古墳時代の遺構を確認したため、太田原高州遺跡として文化財保護法にもとづく保護措置が必要と判断した。



第1図 遺跡位置図

第2節 調査の経過

太田原高州遺跡では1～4次までの発掘調査が実施されており、1・2・4次調査は香川県埋蔵文化財センター、3次調査は高松市教育委員会による。このうち、本書で対象とするのは2次調査の一部の658m²と4次調査の324m²である。2次調査は平成23年10月1日から平成24年2月10日まで、4次調査は平成25年4月1日から5月31日まで実施した。また、平成23年12月10日と平成25年5月18日に現地説明会を開催し、それぞれ218名、60名の参加者を得た。

整理作業では2冊の報告書にまとめる方針をとり、本書には弥生時代の区画墓を中心とした範囲(2次調査の一部と4次調査)を収録した。7世紀の集落を中心とした1次調査と2次調査の一部、5・6次調査については『太田原高州遺跡2』に掲載する予定である。本書の対象となる範囲の整理作業は平成25年8月1日から11月30日まで実施した。

第3節 調査体制・整理体制

発掘調査および整理作業の体制は以下のとおりである。

平成23年度発掘調査体制一覧表

香川県教育委員会事務局生涯学習・文化財課		香川県埋蔵文化財センター	
総括 課長	炭井 宏秋	総括 所長	藤好 史郎
課長補佐	亀山 隆	次長	真鍋 正彦
総務・生涯学習推進グループ		総務課 課長(兼務)	真鍋 正彦
副主幹	香西としみ	副主幹	林 文夫
主任主事	丸山 千晶	主任	古市 和子
文化財グループ		主任	中川 美江
課長補佐	西岡 達哉	主任	高木 秀哉
主任文化財専門員	山下 平重	主任	広瀬 健一
文化財専門員	松本 和彦	調査課 課長	森 格也
		文化財専門員	乗松 真也
		嘱託(土木)	砂川 哲夫
		嘱託(調査技術員)	東潤 愛
		嘱託(調査補助員)	東原 輝明
		嘱託(整理)	池田 京子
		嘱託(整理)	木下美千代
		嘱託(整理)	徳永 貴美

平成25年度発掘調査・整理作業体制一覧表

香川県教育委員会事務局生涯学習・文化財課		香川県埋蔵文化財センター	
総括 課長	増田 宏	総括	所長 真鍋 昌宏
副課長	木虎 淳		次長 前田 和也
総務・生涯学習推進グループ		総務課	課長(兼務) 前田 和也
副主幹	松下由美子		主任 宮武ふみ代
主任主事	丸山 千晶		主任 俊野 英二
文化財グループ			主任 中川 美江
課長補佐	片桐 孝浩		主任 高木 秀哉
主任文化財専門員	山下 平重	調査課	課長 森 格也
文化財専門員	松本 和彦		主任文化財専門員 森下 英治
			文化財専門員 小野 秀幸
			技師 真鍋 貴匡
			主任 西谷 敬司
			嘱託(調査補助員) 藤井 菜穂子
			嘱託(整理) 脇 恵
		資料普及課	課長(兼務) 森 格也
			文化財専門員 乗松 真也
			嘱託 伊藤 真紀
			嘱託 葛西 薫
			嘱託 竹村 恵子
			嘱託 牧野 香織

第 2 章 立地と環境

第 1 節 地理的環境

太田原高州遺跡は香川県高松市太田上町に所在する。

香川県は四国の北東部の一画を占め、四国島の一部と瀬戸内海上の島嶼部で構成されている。県域南部では東西に讃岐山脈が伸び、そのまま徳島県境となる。北は備讃瀬戸と一部の島で岡山県と隣接し、西は燧灘とわずかな平野で媛県と接する。高松市は高松平野を中心とした地域を市域とし、東西に長い香川県のほぼ中央に位置する。香川県の県庁所在地であり、2014 年 8 月時点の人口はおよそ 420,000 人である。

高松平野は、北は瀬戸内海に面し、南は讃岐山脈によって画され、東西にある標高 200m 前後の丘陵と 400m 前後の連峰に挟まれる。平野内には石清尾山や由良山などの独立丘陵が点在する。讃岐山脈から派生する山々からは複数の河川が瀬戸内海に向かって流下し、緩やかな傾斜をもつ扇状地形の平野を形づくる。古代以前には諸河川からの支流や低地が錯綜し、これらに囲まれた微高地が平野内に点在していたとみられる。高松平野で最大規模の香東川は、現在でこそ石清尾山西麓の流路しかみられないが、中世以前には海岸線から約 8km 程度さかのぼった地点で分岐し、石清尾山の東にも流れていた。特に旧流域右岸の広い範囲では、香東川から派生する支流が網目状にいくつも流下していたと考えられ、南西から北東にかけての緩やかな傾斜を形成する。また、香東川右岸を錯綜するこれらの支流や低地に囲まれた微高地が平野内に点在していたとみられる。

第 2 節 歴史的環境

太田原高州遺跡が所在する高松市太田上町は、近世以降、1940 年(昭和 15)に高松市に合併されるまでは太田村の一部であった。古代には讃岐国香川郡の 12 郷のひとつ、大田郷に属していた。大田郷は現在の高松市太田上町・太田下町・松縄町・伏石町も含めた地域に比定され、香東川下流域の右岸に位置する。大田郷は東南北でそれぞれ笑原・坂田・成相・大野・百相・多配郷に隣接し、また、山田郡喜多郷とも接する。

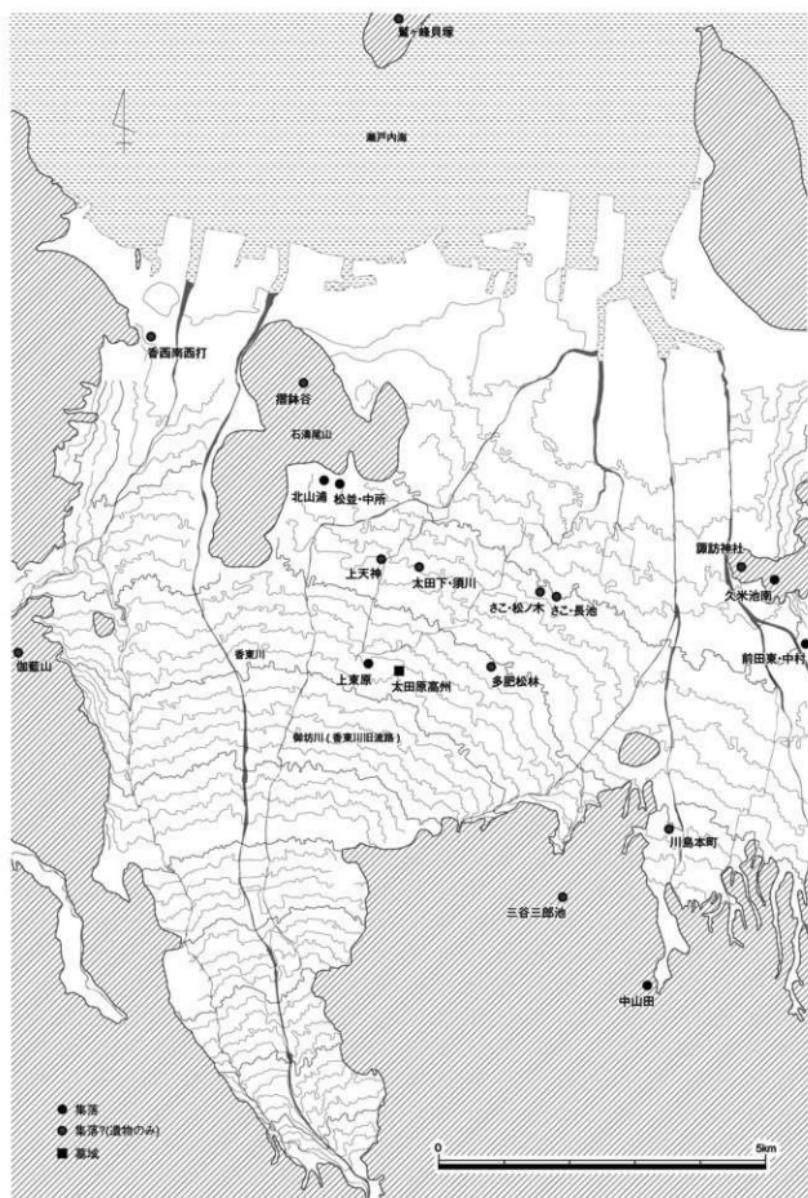
香東川からやや離れた地域には条里型地割(木下 1991)が広がり、大田郷域の太田原高州遺跡や多配郷域の多肥北原西遺跡の調査成果からは一帯の条里型地割が 8 世紀の早い時期に施工されたとみられる。7 世紀には大田郷の東に隣接する多配郷域の多肥北原遺跡で 11 棟の竪穴建物が、西方の大野郷域にある大下遺跡では 15 棟の竪穴建物が重複して確認されており、いずれの主軸方位も条里型地割とは合致しない。また、近年発掘調査が進められている百相郷域の萩前・一本木遺跡では 6 ~ 7 世紀の竪穴建物が多数確認され、建物群を方形に開む溝も存在する。これまで、高松平野では 6 ~ 7 世紀の居住遺構がまとまって検出された例は皆無だったが、この数年の調査によってデータが増加し、その分布に偏りがあることもわかつてき(乘松 2014a)。同時期、特に 6 世紀を中心として高松平野沿岸部付近の石

清尾山周辺の山塊や、平野を囲む丘陵地には横穴式石室を主体部とする古墳が多数築造される。また、7世紀半ばには瀬戸内海に突出する屋島山上に古代山城の屋嶋城が築かれる。明らかになりつつある集落遺跡の実態は、これら後期古墳や屋嶋城と合わせて同時代の高松平野の動向をうかがううえで重要な資料といえる。

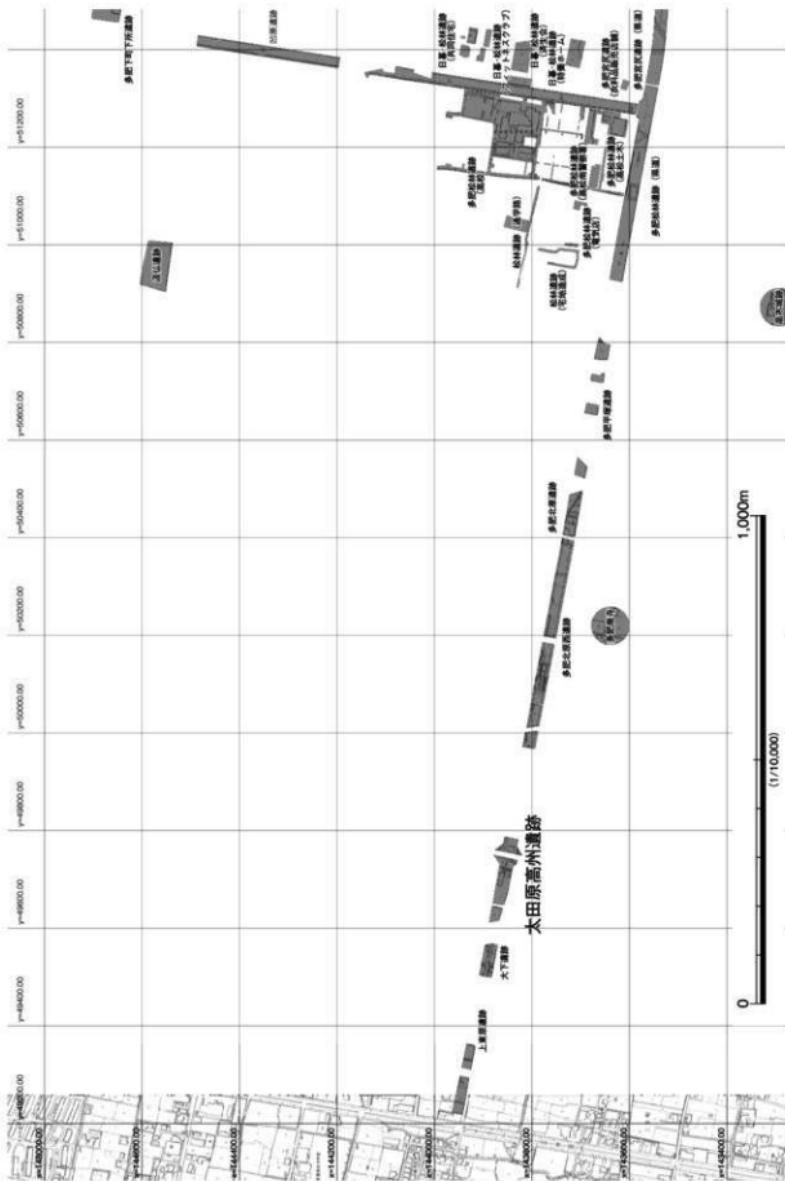
旧香東川の支流や低地に挟まれて点在する微高地の多くには弥生時代の遺跡が立地する。上天神遺跡では前期に開削された大形水路が後期に再度手が加えられており(大久保 1995c)、香川県内でみても水路の開発は後期に大きく進展する(信里 2008)。後期後半に水路網が整備された上東原遺跡では直近に居住遺構が確認されず、水路から最寄りの集落(下大遺跡)までは約300m離れている。このような集落から隔たった場所にも水路が設けられる後期後半の状況は、集落と水路が近接する中期(多肥松林遺跡)のあり方とは異なる。水路に関連する生業(水田稲作を含む農業など)への集落の関与する範囲が、中期から後期にかけて広がっているとも考えられるが(乗松 2014b)、この点を詰めるには集落と水路、可能であれば農業生産遺構との関係を明らかにしていく必要があるだろう。

本報告収録の太田原高州遺跡では弥生時代中期後葉の区画墓群が検出されているが、高松平野で中期中葉以前の墓制は不明瞭である。香川県内に目を転じると丸亀平野の佐古川・窪田遺跡や三豊平野の桶ノ口遺跡などで前期後半～中期前葉の集団墓が確認されている。これらの集団墓では、埋葬施設の方位を揃える、埋葬施設の区画を共有するなど、なんらかの規制によってグルーピングされた単位が複数配置されることで墓域が成り立っている。こういった現象が中期中葉以降の集団墓にも引き継がれるかは今後の検討によるところだろう。

香東川右岸の高松平野中央部では、中期における集落構造がある程度判明する遺跡として、中期中葉の多肥松林遺跡と中期後葉の上東原遺跡が知られている。多肥松林遺跡では微高地上で竪穴建物と掘立柱建物がセットになって単位を構成し、その単位が複数集まることで集落を形づくりている。上東原遺跡も微高地上に立地するが、掘立柱建物7棟に対して竪穴建物1棟と、掘立柱建物を主体とする集落で中期中葉の多肥松林遺跡とは集落構成をやや異なる。両遺跡の差異には、それぞれの集落がもつ機能の差が表れているのかもしれない。また、周辺では同時期の微高地上に位置する集落はほとんど確認されておらず、平野全体としては伽藍山遺跡、久米池南遺跡、擂鉢谷遺跡、西浦谷遺跡、三谷三郎池遺跡など、丘陵上や斜面地に立地する遺跡が多い。中期中葉から後期初頭にかけては、女木島の鷺ヶ峰貝塚のように備讃瀬戸島嶼部や沿岸部にも遺跡が存在しており、さまざまな生業への関与が遺跡立地の多様性につながった理由のひとつとして考えられよう(乗松 2006)。久米池南遺跡を例に挙げれば、この時期の集落は6棟程度、もしくはそれ以下の居住遺構が並存してひとつの集落を構成しているようだが、遺構配置や出土遺物などから集落内における明確な分節構造を読み取ることは難しい。同様に同時期の集落間の関係についても推測できる材料に乏しいのが現状である。中期後半の墓域が認められる他地域(九州北部や近畿など)や、弥生時代前期後半～中期前葉の佐古川・窪田遺跡周辺(信里 2007)でアプローチが試みられているように、集落内の構造や集落間関係に言及するには墓域の分析が手がかりになるだろう。



第2図 高松平野における弥生時代中期後葉の遺跡



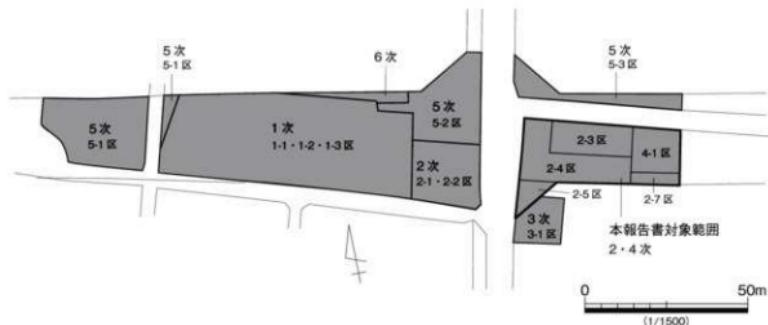
第3章 発掘調査の記録

第1節 調査の方法

太田原高州遺跡では、周辺工事の工程や作業ヤードの確保のため、調査対象地を2-3区から4-1区の調査区に分割して調査を実施した。遺構検出面までは盛土と旧耕作土が80~100cm程度堆積していたため、その部分については重機を用いて掘削し、遺構検出面以下は人力で掘り下げて調査した。

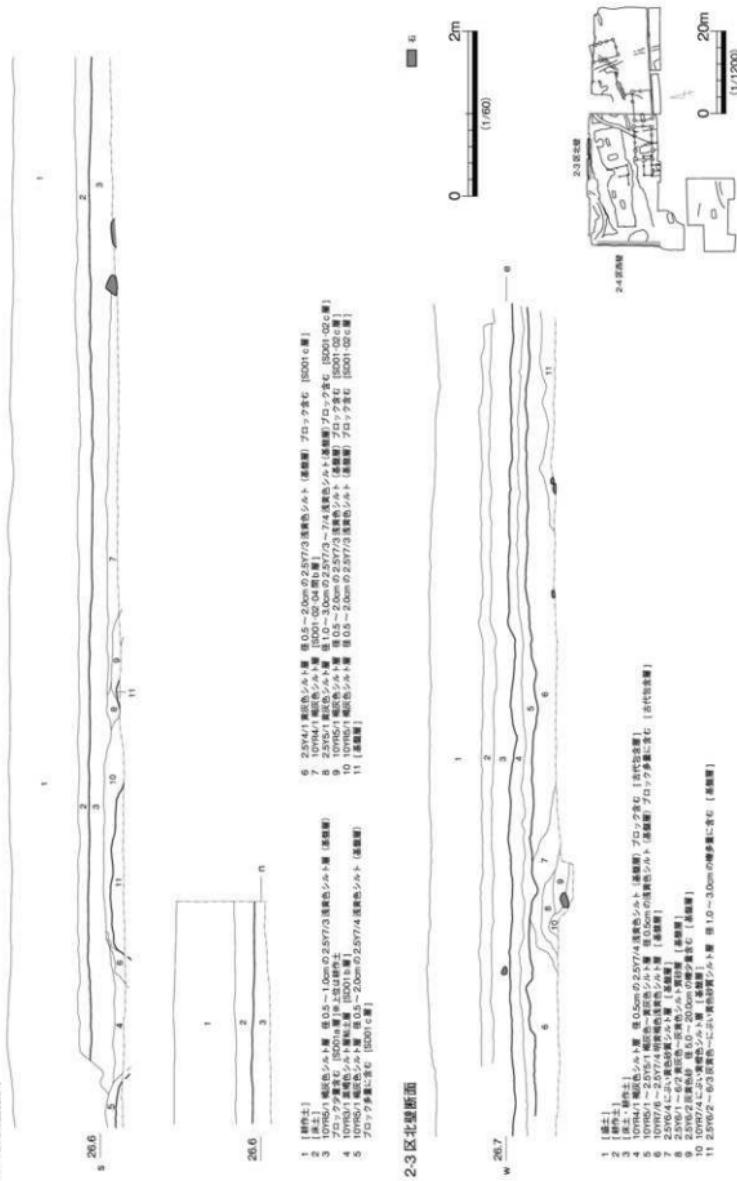
第2節 基本層序

調査対象地全域には地表面から50~60cm程度の深さまで花崗土による盛土があり、盛土の下位には近代以降と思われる耕作土が堆積している。その直下が浅黄色シルト層を中心とする基盤層だが、上位数cmが耕作に伴う搅拌などの影響を受けて遺構を認識しがたく、結果的にはこの部分の下面での遺構検出となった。2-4区西端部から2-3区にかけては古代の包含層である褐灰色シルト層が広がっており(2-4区西壁3層・2-3区北壁4・5層)、7世紀以前の遺構は古代包含層下で確認した。なお、古代包含層と区画溝の上位堆積層(a層)は連続した同一層であり、古代の建物(SB01・04)構築に伴う整地層の可能性がある。浅黄色シルト層の下位には礫を多量に含む層がある(2-3区北壁11層、2-4区南壁19層など)。起伏に富むこの礫層は、2-4区東部から2-7区、3-1区西部では遺構検出面に露出している。



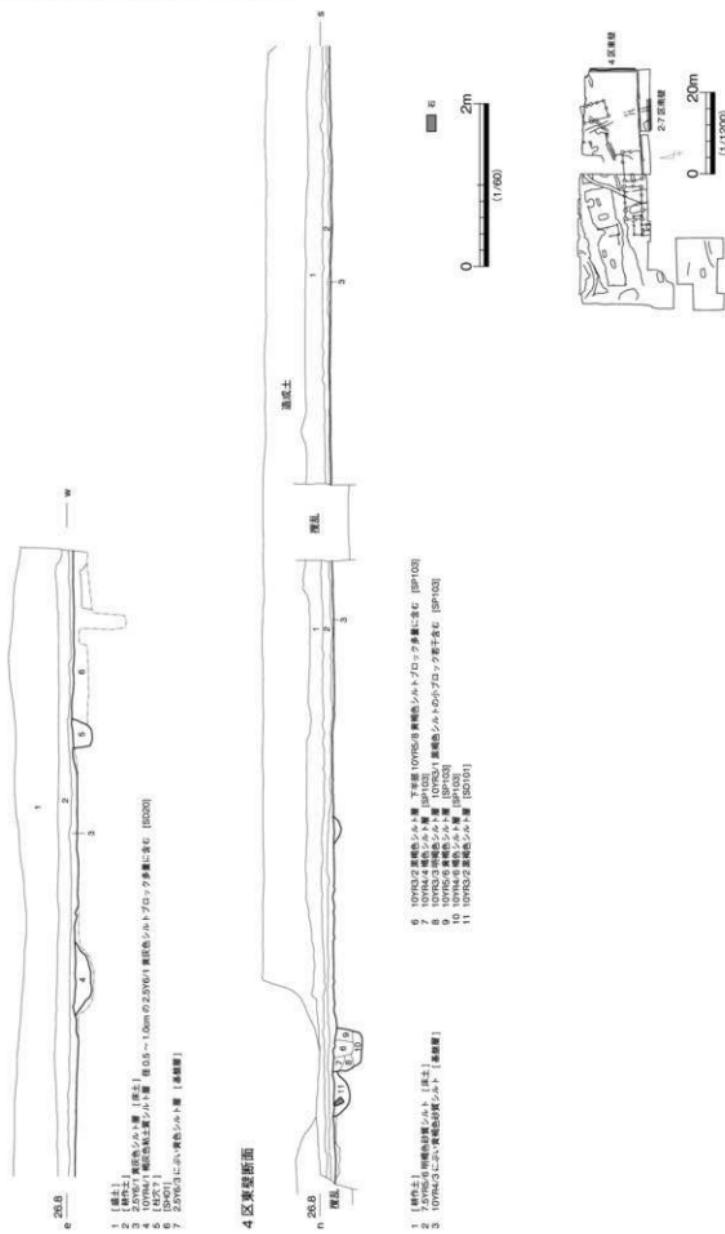
第4図 調査区割図

2-4区西壁断面



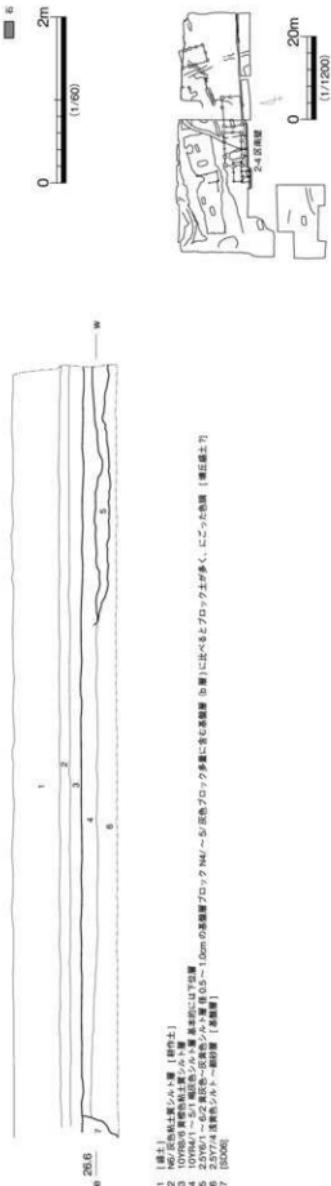
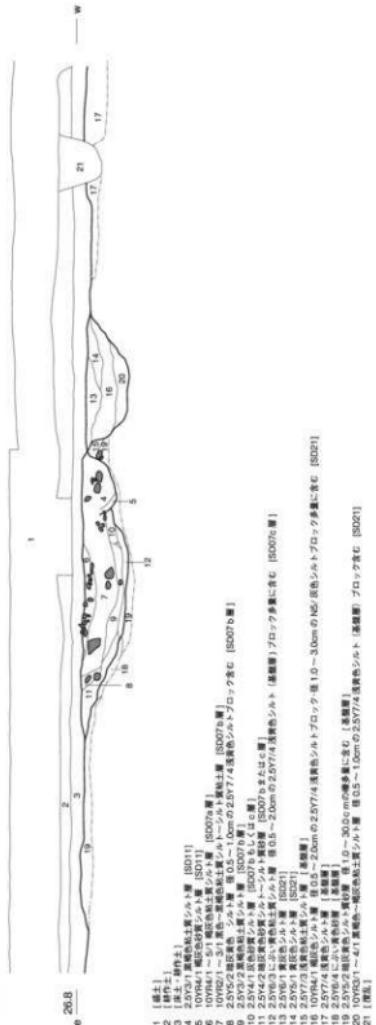
第5図 2-4区西壁・2-3区北壁断面

2-7 区南壁断面

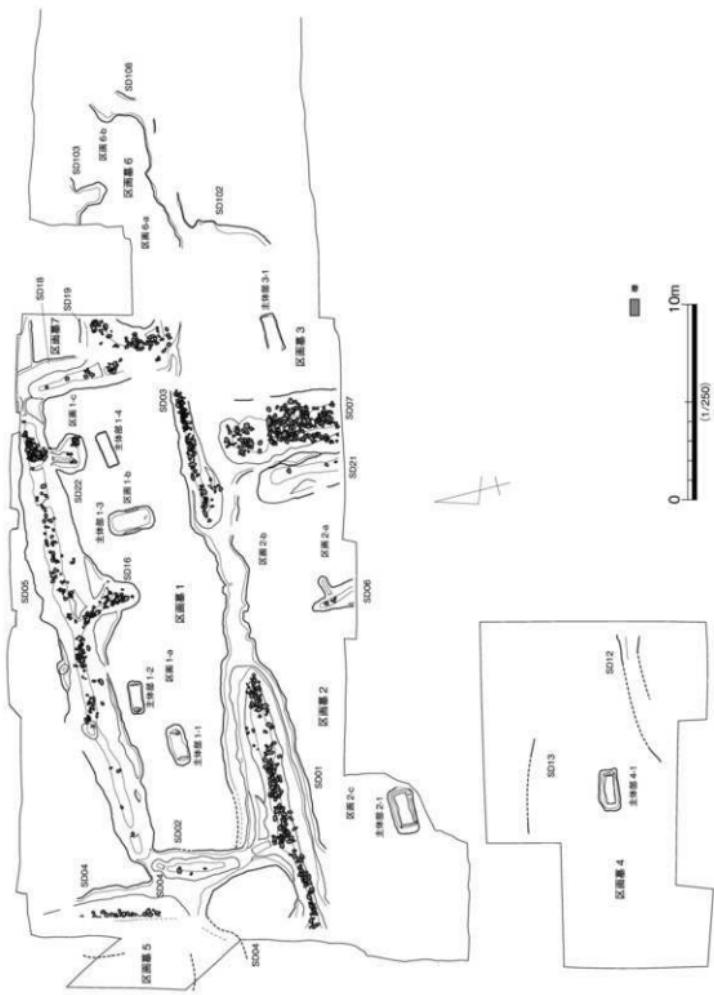


第6図 2-7区南壁・4区東壁断面

4区南壁断面



第7図 4区南壁断面



第3節 弥生時代の区画墓群と出土遺物

1 概要

弥生時代中期後葉(中期Ⅲ)に溝で方形(基本的には長方形)に区画した区画墓7基が構築される。6基の区画墓は区画溝を共有し、残る1基は他の1基と区画溝を隣接させている。削平を受けているため墳丘とみられる土はわずかに確認できるのみである(主体部2-1周辺)。墳丘構成土の由来とみられる区画溝の容積から推定できる墳丘高は区画墓1で30cm程度、区画溝が浅い区画墓6・7にいたってはさらに低くなる。中期後葉に掘削された区画溝は8世紀まで時間をかけて埋没する。区画溝堆積層の中位は弥生時代後期後半～終末期の遺物を含み、調査地北端で検出したSD05は特に多くの遺物を有する。これらの遺物は堆積途中の区画溝内に廃棄されたものであろう。当該期の遺構(SB03、SD101など)は区画墓群の東西で確認されているほか、遺物の出土量を勘案すれば、SD05の北方(調査対象地外)に弥生時代後期後半の集落が存在する可能性もある。区画溝の上位層からは8世紀の遺物が出土している。この段階で区画溝は完全に埋没し(埋め立てか)、その後、掘立柱建物(SB01・04)が築かれている。なお、弥生時代後期後半の遺構が区画溝の内側に存在せず、7世紀中葉(様相2)の須恵器を伴うSD08・10・11も区画内部をおよそ避けるように位置することを考慮すれば、8世紀までは区画溝が落ち込み状に残り、区画溝内の墳丘(またはその残骸)も存在し続けており、区画溝の埋め立てとともに墳丘も破壊された蓋然性が高い。

2 立地

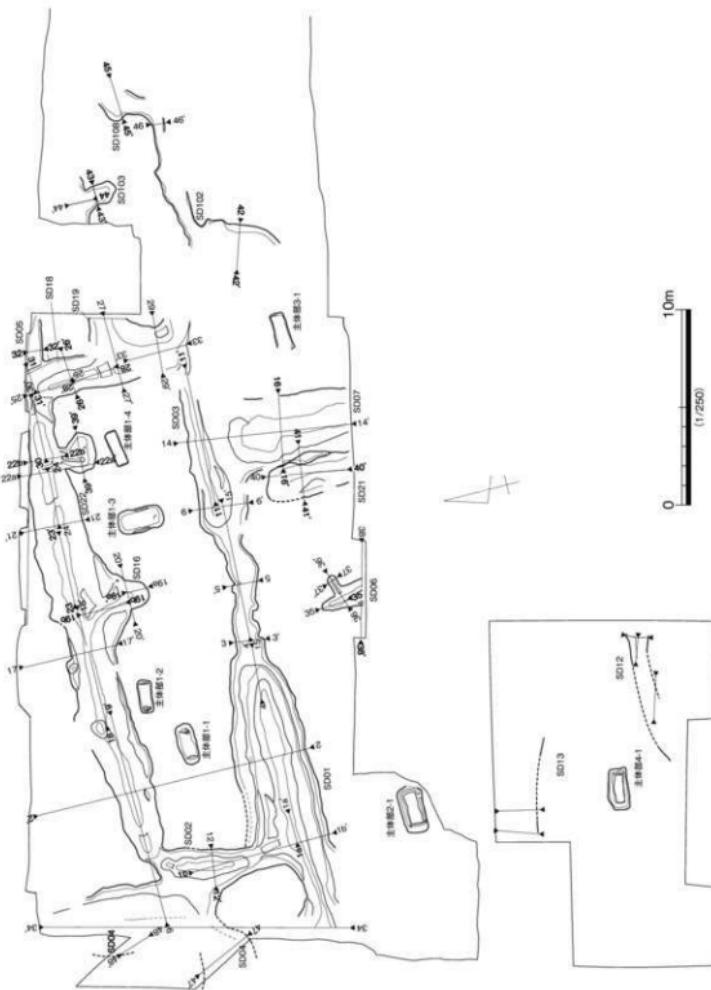
調査対象地周辺では、基盤層中の礫層に凹凸があり、礫層が窪む部分にシルト層が堆積している。よって、平面的には礫層とシルト層が交互に検出されることになる。この礫層の盛り上がりと盛り上がりに挟まれたシルト層を中心として区画墓群が築かれている。シルト層の堆積が薄く、礫層のレベルが高くなっている区画墓1の北東部分の区画溝(SD05の一部、SD18)は底面が浅い。区画溝掘削の際、礫層に達した時点で、それ以上深く掘り下げるのをあきらめているようにもみえる。区画墓4の西部には礫層がひろがり、現状では西辺の区画溝が確認されていない。ここでは区画溝が掘削されていない

	区画墓1	区画墓2	区画墓3	区画墓4	区画墓5	区画墓6	区画墓7
長軸(m)	溝中心間 溝内側上端間	26.0 24.5	300+ 27.0+	9.0+ 8.5+	16.0+ ?	8.0+ ?	13.0 11.0 25+
短軸(m)	溝中心間 溝内側上端間	8.0 4.5～6.0	9.0～11.0 7.0～8.0	7.0～9.0 4.5～7.0	10.0+ 5.0+	4.0+ ?	5.5 4.0 25+
短軸長1に対する長軸長(m)の比	溝中心間 溝内側上端間	3.3 4.7	3+ 3+	12+ 15+	?	?	24 28 ?
主体部数		4	1+	1+	1+	?	?

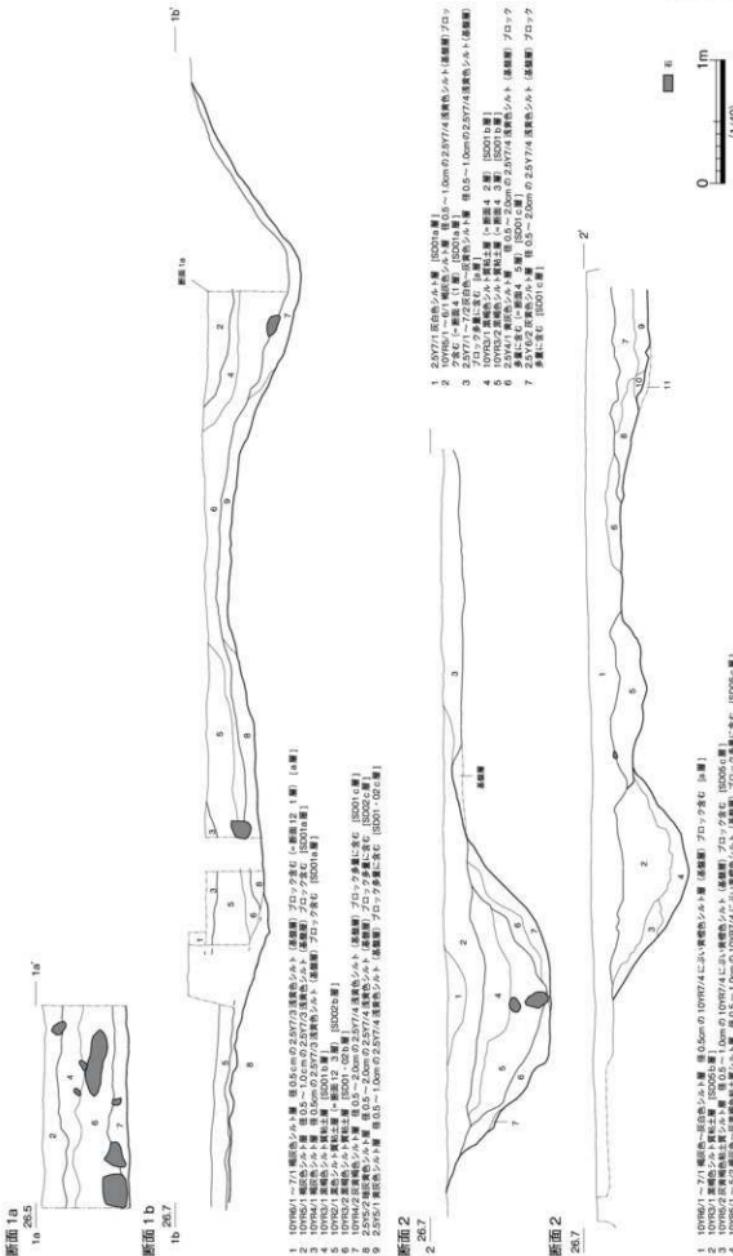
第1表 区画墓属性表

	主体部1-1	主体部1-2	主体部1-3	主体部1-4	主体部2-1	主体部3-1	主体部4-1
長軸(m)	208	1.62	2.32	1.80	2.46	1.92 ²	2.08
短軸(m)	102	0.62	1.20	0.56	1.34	0.70	1.04
深さ(cm)	0.54+	0.18+	0.56+	0.24+	0.52+	0.20+	0.22+
長軸内法(m)	1.28	1.14	1.68	1.40	1.76	1.72	1.48
短軸内法(m)	0.58	0.40	0.48	0.34	0.66	0.46	0.54
小口板掘り込み	あり	あり	なし	なし	あり	なし	あり
長側板掘り込み	なし	なし	なし	なし	あり	なし	あり
着装品・副葬品	なし	なし	緑色頬灰岩斜管長2	なし	水晶斜管長7	なし	なし

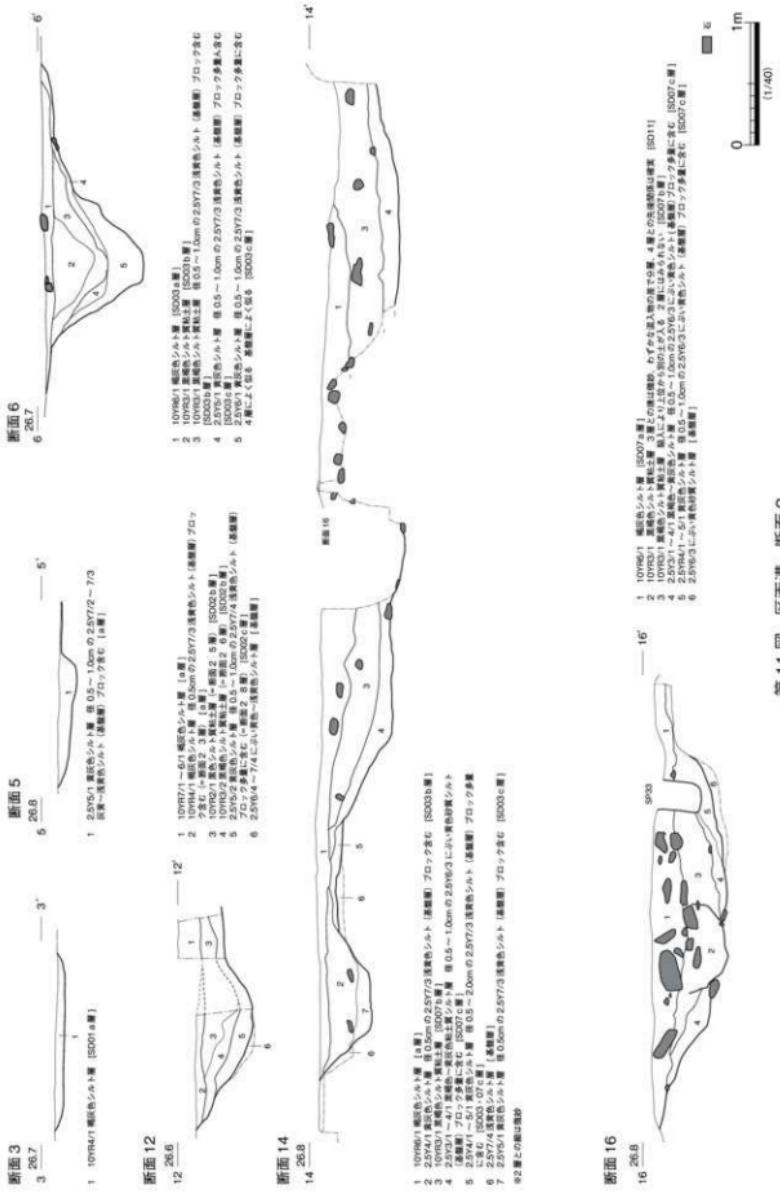
第2表 主体部属性表



第9図 溝区画断面位置

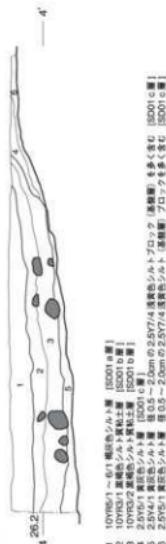


第10圖 溝區畫面



第 111 図 区画溝 断面 2

断面4



断面15



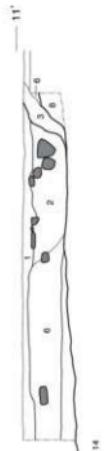
断面11



- 1 10YR6/1 黄褐色シルト土 [a層]
2 2.5Y3/1 - 4/1 黄褐色シルト土 [b層] [ISOD11]
3 2.5Y6/2 黄褐色シルト土 [c層]
4 10YR5/1 黄褐色シルト土 [d層]
5 10YR5/2 黄褐色シルト土 [e層]
6 2.5Y6/2 黄褐色シルト土 [f層]
7 2.5Y7/3 黄褐色シルト土 [g層]
8 2.5Y7/3 黄褐色シルト土 [h層]
- 1 10YR6/1 黄褐色シルト土 [a層]
2 2.5Y7/3 黄褐色シルト土 [b層]
3 2.5Y7/3 黄褐色シルト土 [c層]
4 10YR5/1 黄褐色シルト土 [d層]
5 10YR5/2 黄褐色シルト土 [e層]
6 2.5Y6/2 黄褐色シルト土 [f層]



第12図 区画溝 断面3



断面14

11' 11'

11'

11'

11'

11'

11'

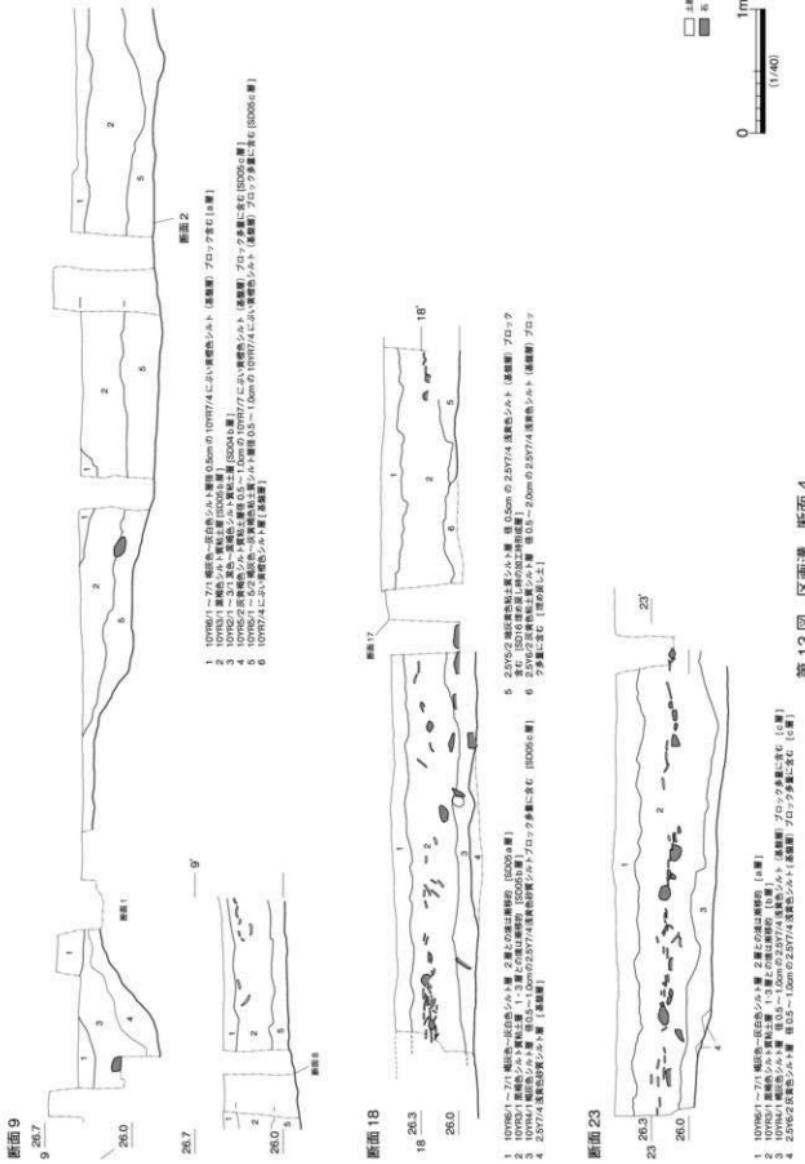
11'

11'

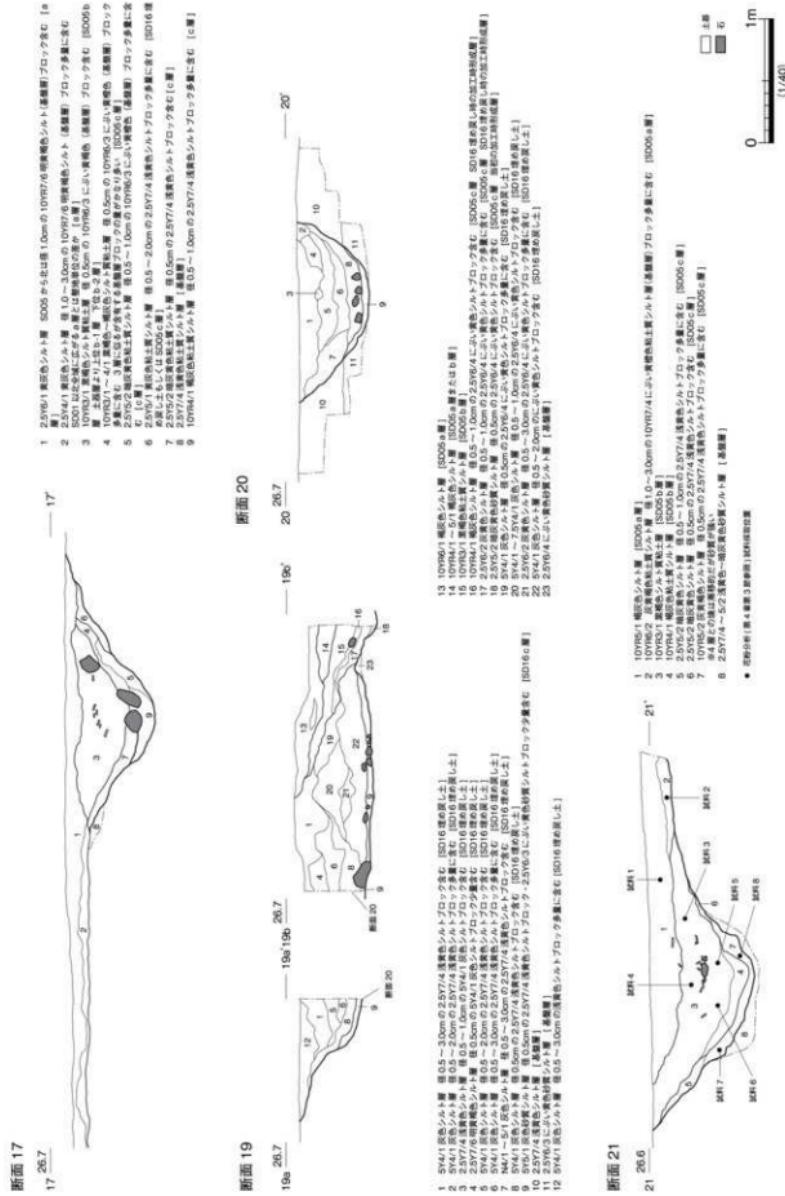
11'

11'

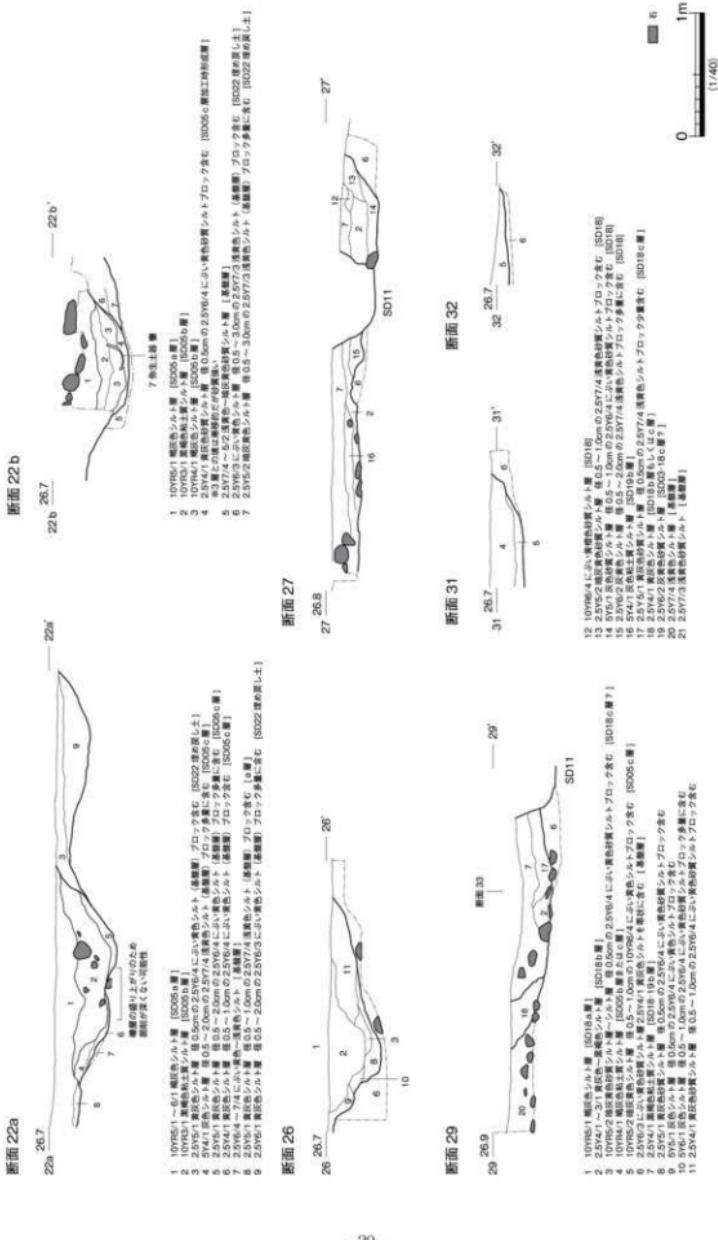
11'



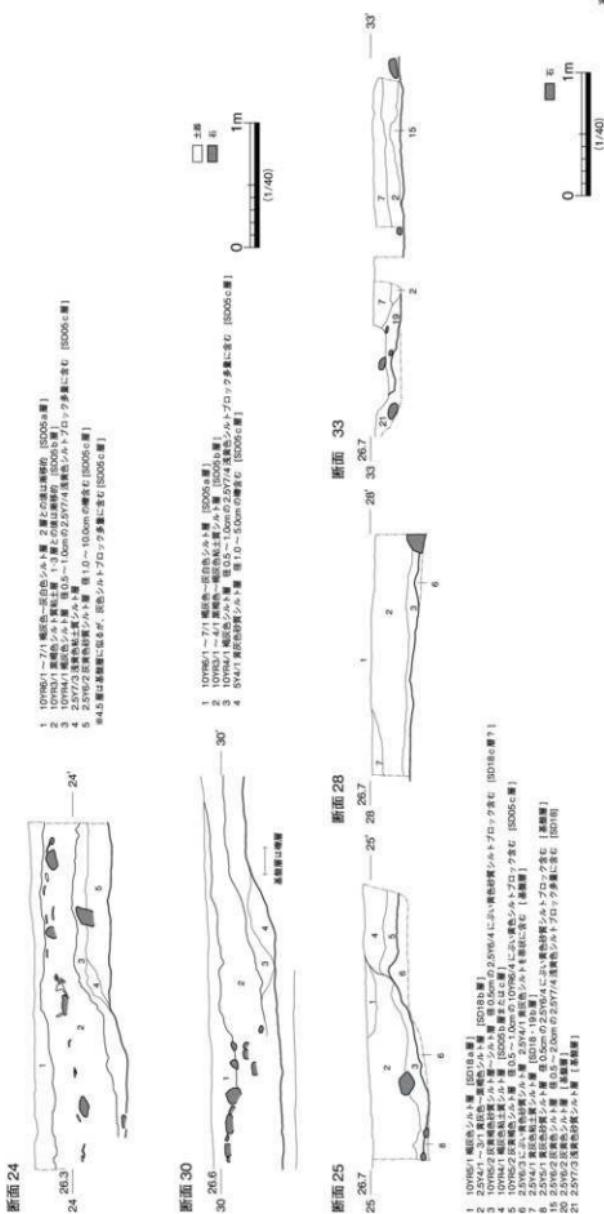
第 13 図 区画溝 断面 4



第14図 溝区画断面5



第15回 区画溝 断面6



第16図 溝区画断面

断面 34
34 — 26.7

1 10Y6-1-71 地中層：灰色の砂岩シルト層 [0.077/4] に小さい青色カルト [透鏡層] プロック含む
2 10Y6-1-31 地中層：灰色の砂岩シルト層 [0.08/4] [透鏡層]
3 10Y6-1 灰色の砂岩シルト層 [透鏡層] [0.077/4] に小さい青色カルト [透鏡層] ブロック含む [SD044番]
4 10Y6-2 灰色の砂岩シルト層 [透鏡層] [0.05~0.10m] の 10Y6-1 に小さい青色カルト [透鏡層] ブロック含む [SD044番]
5 10Y6-1 灰色の砂岩シルト層 [透鏡層] [0.05~0.10m] の 10Y6-2 に小さい青色カルト [透鏡層] ブロック含む [SD044番]
6 10Y6-1 灰色の砂岩シルト層 [透鏡層] [0.05~0.10m] の 10Y6-2 に小さい青色カルト [透鏡層] ブロック含む [SD044番]

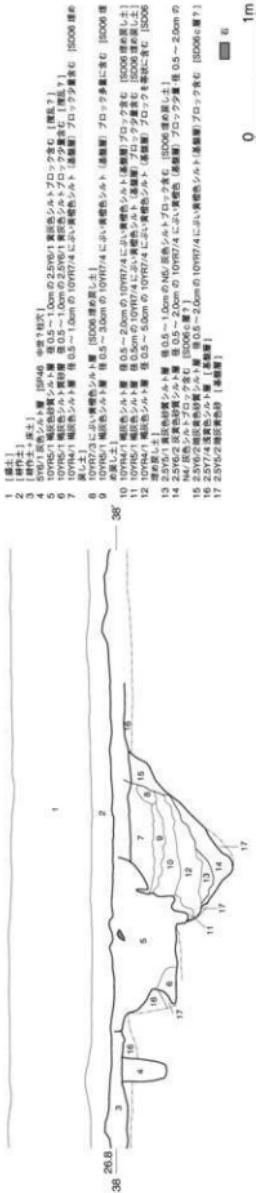
断面 35



断面 37



断面 38



0 1m
6 (1/40)

第 17 図 区画溝 断面 8



可能性もある。一方、区画墓 1・3 間の SD07 のように疊層を深く掘り抜いて形成される区画溝もある。堆積環境と区画墓のあり方からは、掘削に大きな労力を有する疊層部分を避けて区画墓群の位置が選ばれているようにみえる。区画溝の掘削深度も、基本的にはシルト層の下位にある疊層のレベルに左右されるが、それにとらわれない区画溝もある。

3 平面形と区画

四周の区画溝を確認した区画墓 1 は長方形の平面形を有する。長軸長は溝中心間で 26 m、内側上端間で 24.5 m、短軸長は溝中心間で 8 m、内側上端間で 4.5 ~ 6 m である。長短軸比は、区画溝中央間で測れば 3.3 : 1 となる。区画墓 6 は、溝中央間で直軸 13 m、短軸 5.5 m、内側上端間で長軸 11 m、短軸 4 m である。長短軸比は溝中心間で 2.4 : 1、内側上端間で 2.8 : 1 である。3 辺が確定な区画墓 2 は、8 m の短軸に対し、長軸が 27 m 以上とやはり平面形は長方形である。短軸長が 7 m の区画墓 4 の長軸長も 14 m 以上であり、平面形は長方形とみられる。以上の点から、長・短軸長が不明な区画墓 3・5 についても平面形は長方形と推測できる。

区画墓 1 ~ 4・6・7 は主軸方向がほぼ N0° と共に、それぞれ隣接する区画墓と区画溝を共有する。区画墓 5 の主軸は N9° E で他の 6 基に比べてやや東に振れる。また、区画溝も共有ではなく、東辺の区画溝 SD04 の一部を区画墓 1 の西辺区画溝 SD02 に隣接させる点で他の 6 基とは異なる。

区画溝には埋め戻されたものがあり (埋没溝)、SD16・22 は区画墓 1 を区画 1-a ~ 1-c に、SD06 は区画墓 2 を区画 2-a ~ 2-c に、SD103 の一部は区画墓 6 を区画 6-a・6-b に分割するようにみえる。この場合、分割された区画の平面形も長方形になる。

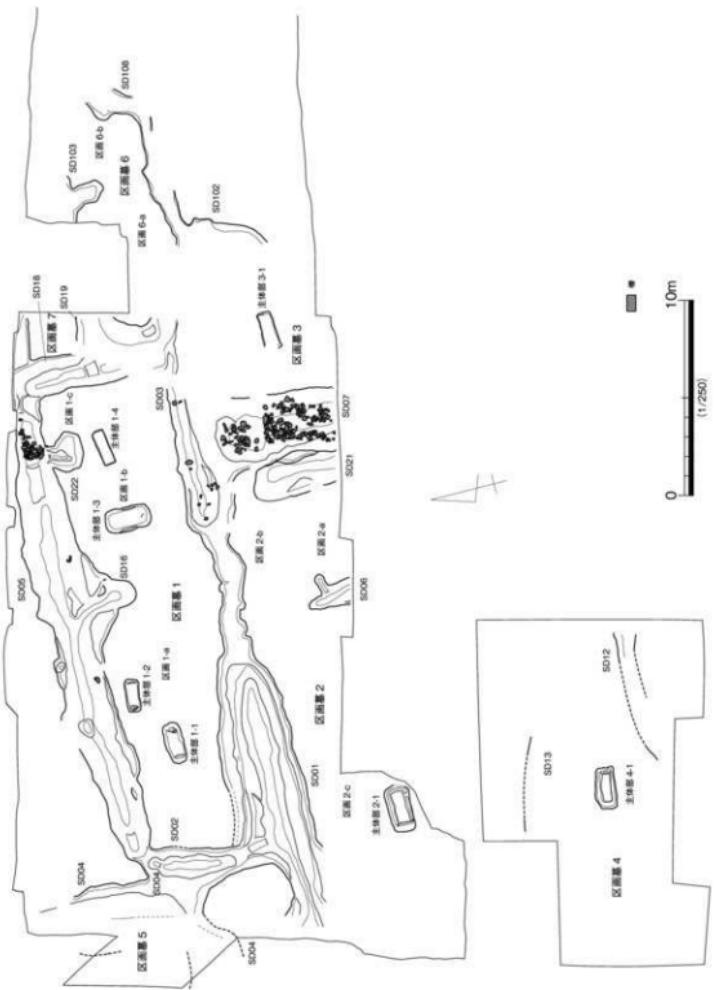
4 区画溝

区画溝の平面形は直線的で、区画墓 1・2・3・6・7 のコーナーを形成する接続部分は直角に近い。区画墓 1・2・3・5 を区画する区画溝では、コーナーが浅くなり、直線部分も凹凸がある。SD01・03 は同一の区画溝だが、中間がかなり浅く、その両端部分が深くなり、コーナーに向かって再度浅くなる。SD05 も深い部分が 3 か所ある。浅い部分は埋没溝 SD16・22 を延長した先にあたり、これらの区画溝に囲まれる小さな区画のコーナー部分とみることもできる。

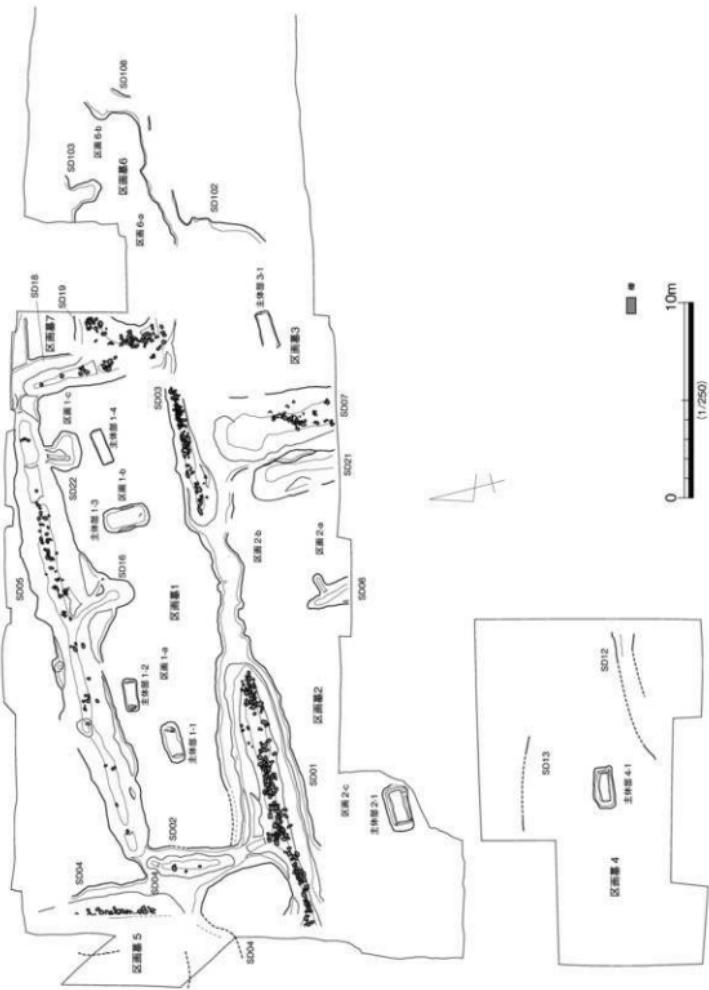
区画溝の堆積層は a ~ c 層に大別できる。最下層の c 層は細かな基盤層のブロックを含み、区画溝掘削時かその直後に堆積した層とみられる (加工時形成層)。供献土器と判断した完形に近い土器は c 層上面からの出土である。中位の b 層は、SD01・02・04・05・08 では黒褐色～褐灰色系のシルト～粘土質シルト層を中心とする。堆積は厚く、時間をかけて埋没した様子がうかがえる。前述のようにこの層からは弥生時代後期後半～終末期の遺物が出土している。特に区画墓 1 の北辺溝 SD05 の中位からの出土量は著しく、SD05 の近隣 (北側) に弥生時代後期後半を中心とする集落があり、そこから多量の土器が廃棄された可能性も考えられる。最上層の a 層は灰白色～黄灰色シルト層を中心とし、含有する 8 世紀の遺物は区画溝の最終埋没年代を示す。

5 区画溝内の疊

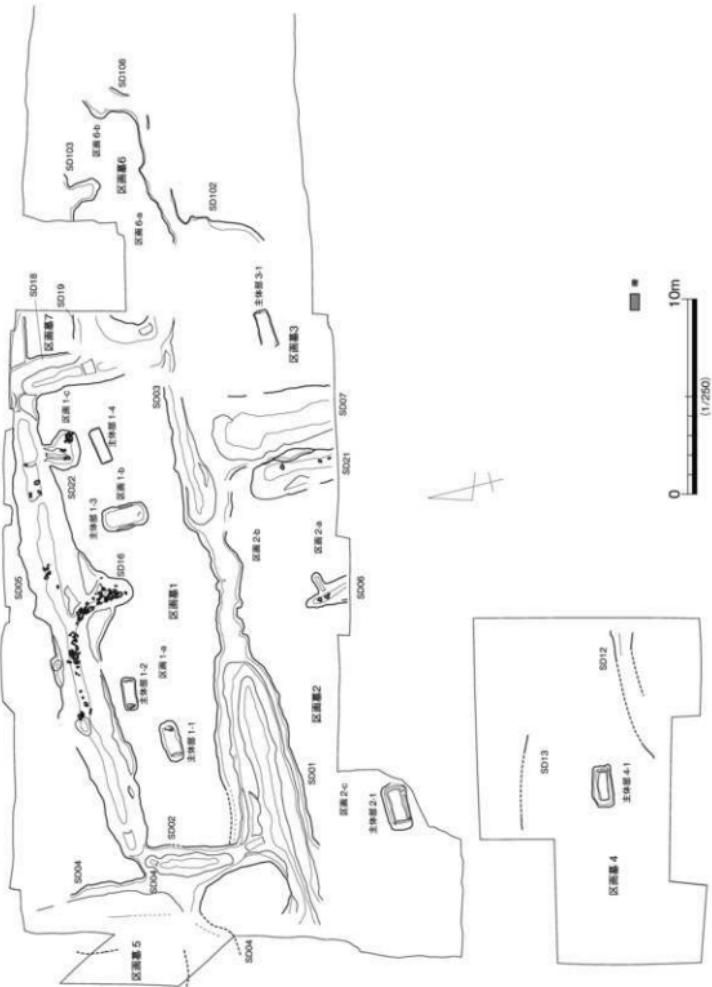
区画溝からは丸みのある疊が多量に出土している。埋没溝 SD06・16・22 では埋め戻し土の下面、底面直上から疊が出土している。これらの疊は、区画溝が掘削されて埋め戻されるまでの期間に落ち込んだ



第19図 区画溝 a層出土品



第20図 区画溝 b 層出土標



第21図 区画溝 c層出土礫

区画溝	層位	礫の粒径				計	備考
		~ 15cm	~ 30cm	~ 45cm	~ 60cm		
SD01	a 層	0	0	0	0	0	
	b 層	46	113	19	3	181	c 層を含む可能性あり
	c 層	0	0	0	0	0	
SD02	a 層	0	0	0	0	0	
	b 層	1	2	1	0	4	
	c 層	0	0	0	0	0	
SD03	a 層	11	3	1	0	15	
	b 層	121	19	0	0	140	
	c 層	0	0	0	0	0	
SD04	a 層	0	0	0	0	0	
	b 層	6	17	3	0	26	
	c 層	0	0	0	0	0	
SD05	a 層	53	15	3	0	71	
	b 層	49	31	3	0	83	
	c 層	43	17	1	0	61	
SD06		1	2	0	0	3	
SD07	a 層	108	81	15	1	205	
	b 層	60	62	8	0	130	c 層を含む可能性あり
	c 層	0	0	0	0	0	
SD16		47	10	3	0	60	
SD18	a 層	0	0	0	0	0	
	b 層	30	24	0	0	54	c 層を含む可能性あり
	c 層	0	0	0	0	0	
SD19	a 層	0	0	0	0	0	
	b 層	15	3	0	0	18	c 層を含む可能性あり
	c 層	0	0	0	0	0	
SD22		9	7	0	0	16	
計		600	406	57	4	1067	
		56.2%	38.1%	5.3%	0.4%	100.0%	

区画溝	層位	礫の粒径				計	備考	
		~ 15cm	~ 30cm	~ 45cm	~ 60cm			
SD01	b 層 + c 層	46	113	19	3	181		
		25.4%	62.4%	10.5%	1.7%	100.0%		
SD02	b 層 + c 層	1	2	1	0	4		
		25.0%	50.0%	25.0%	0.0%	100.0%		
SD03	b 層 + c 層	11	3	1	0	15		
		73.3%	20.0%	6.7%	0.0%	100.0%		
SD04	b 層 + c 層	6	17	3	0	26		
		23.1%	65.4%	11.5%	0.0%	100.0%		
SD05	b 層 + c 層	92	48	4	0	144		
		63.9%	33.3%	2.8%	0.0%	100.0%		
SD06		1	2	0	0	3		
		33.3%	66.7%	0.0%	0.0%	100.0%		
SD07	b 層 + c 層	60	62	8	0	130		
		46.2%	47.7%	6.2%	0.0%	100.0%		
SD16		47	10	3	0	60		
		78.3%	16.7%	5.0%	0.0%	100.0%		
SD18	b 層 + c 層	30	24	0	0	54		
		55.6%	44.4%	0.0%	0.0%	100.0%		
SD19	b 層 + c 層	15	3	0	0	18		
		83.3%	16.7%	0.0%	0.0%	100.0%		
SD22		9	7	0	0	16		
		56.3%	43.8%	0.0%	0.0%	100.0%		
計		318	291	39	3	651		
		48.8%	44.7%	6.0%	0.5%	100.0%		

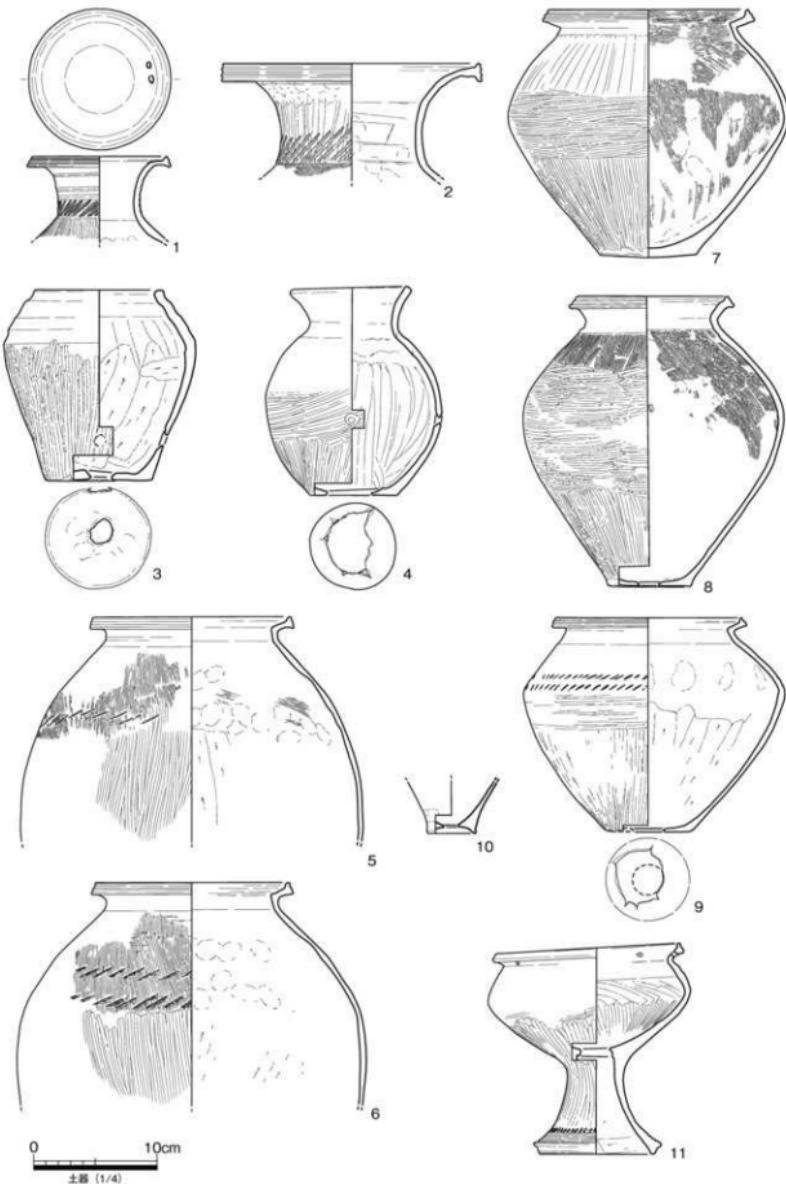
層位	層位	礫の粒径				計	備考
		~ 15cm	~ 30cm	~ 45cm	~ 60cm		
礫層		125	37	1	0	163	
		76.7%	22.7%	0.6%	0.0%	100.0%	

※区画溝、礫層いすれも粒径 8cm 程度以下の礫は含まない。区画溝の調査時に耕土とともに排出している可能性があるためである。

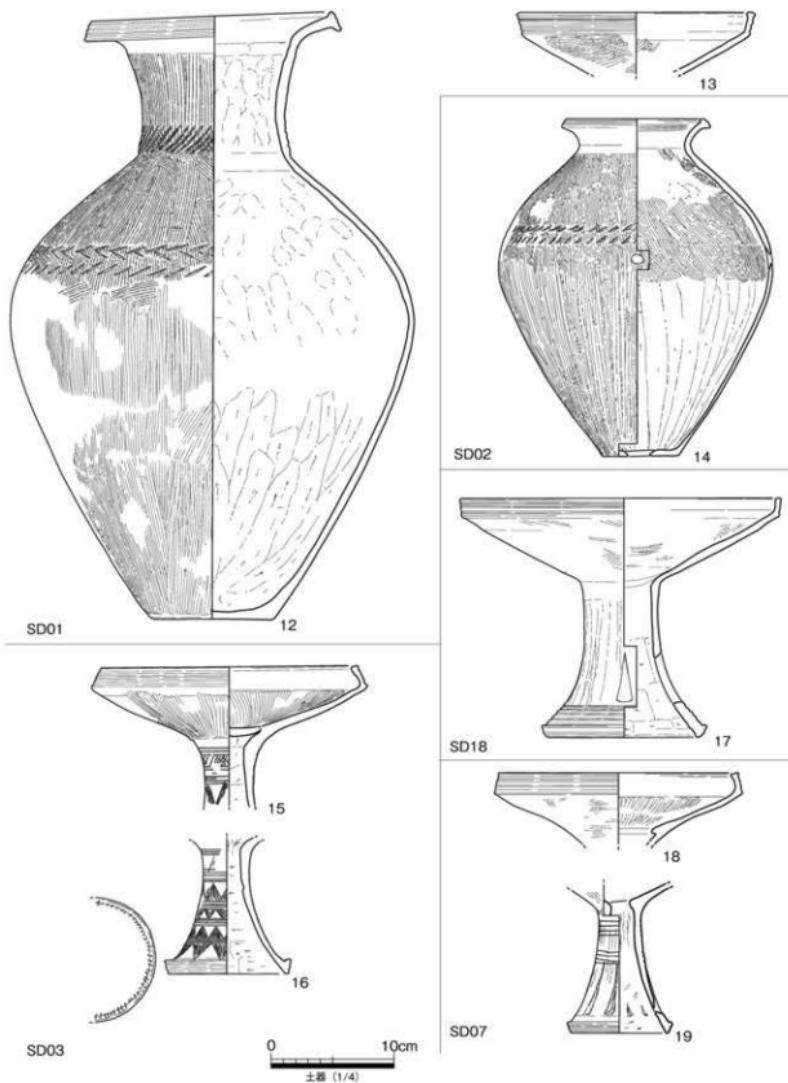
第3表 区画溝出土礫粒径別組成表

第22図 区画墓群 供試土器出土位置





第23図 区画墓1 SD05 供献土器



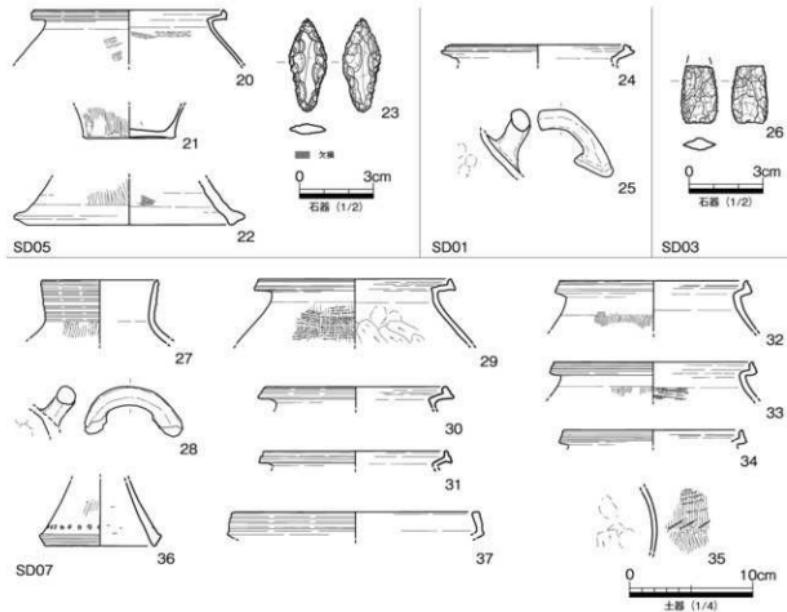
第24図 区画墓1～7 SD01・02・03・18・07 供献土器

だものだろう。また、8世紀までオープンな状態であった区画溝のb層(弥生時代後期後半~終末期)は周辺からの流入土による堆積層の蓋然性が高く、b層出土疊も本来は近接した場所にあったものが区画溝に流れ込んだと推測できる。これらの状況を踏まえれば、疊は区画溝の内側に存在したであろう墳丘に伴っていた可能性がある。ただし、疊が墳丘表面にあったのか(墳丘を覆うように配された、墳丘裾に並べられた、など)、墳丘盛土の中に混じっていたのかはわからない。

疊そのものは周辺に広がる疊層を構成する疊と変わらないが、区画溝出土の疊は30cmまでの疊が90%以上を占め、それを超える大きさのものはわずかにとどまる。疊層の一部をサンプリングして疊のサイズを計測したところ、大半が30cm以下のものである点は区画溝出土疊と共通するが、15cm以下の疊が多い点は異なる(第3表)。このため、区画墓に伴う疊は疊層構成疊がそのまま移されたのではなく、ある程度選択を経たものと思われる。

6 埋没区画溝

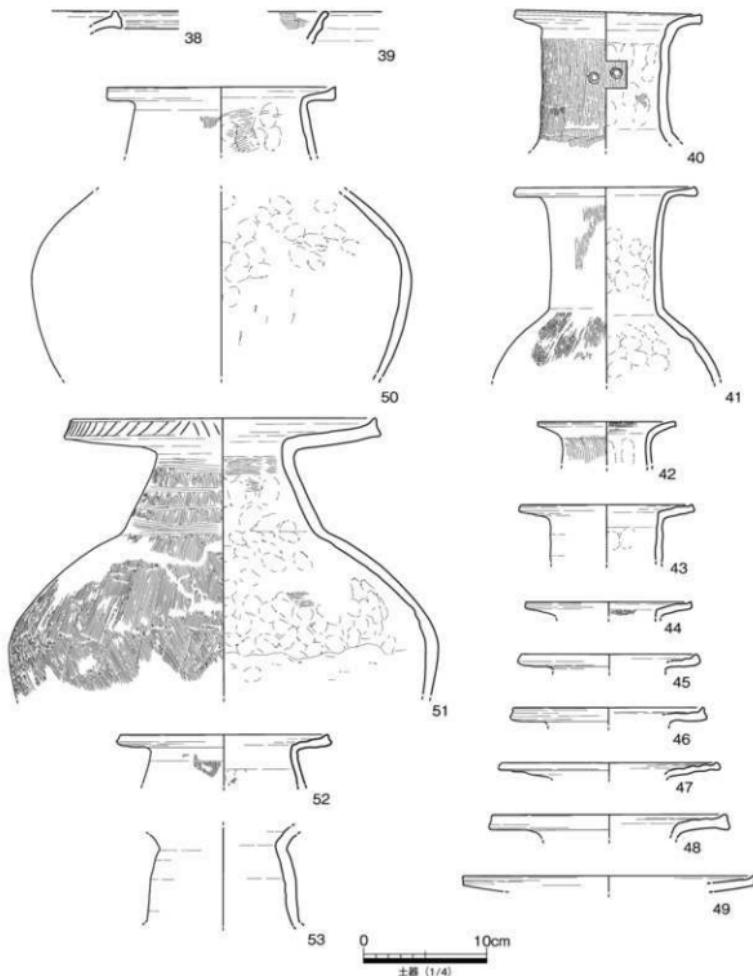
区画墓1のSD16・22はいずれも基盤層ブロックを多量に含む土で埋め戻されている。底面には疊があり、疊が区画溝の内側にあったものだとすれば、SD16・22掘削の後、疊が転落する時間を経てから埋め戻されたことになる。なお、底面直上を除いて、埋め戻し土に疊はほとんど含まれないため、疊が埋め戻しに使われたとは考えにくい。区画墓2のSD06・21も同様である。古代までオープンな状態であったSD07はSD21埋没後に掘削されており、その場合はSD21掘削→SD21埋め戻し→SD07掘削



第25図 区画溝 c層 出土遺物

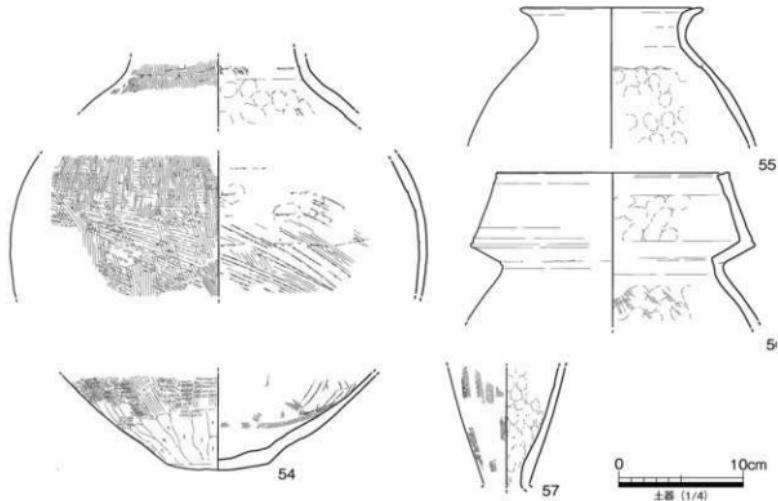
の経過をたどることになる。これらの区画溝を延長すると区画墓内を分割するラインになる。SD16・22とSD05の分岐部分はやや浅くなってしまっており、SD06・16・22を延長した先のSD01・03も浅い部分である。区画墓のコーナー部分を浅くする意識があるなら、これらの溝は先行する小規模な区画墓に伴う可能性がある。

7 供献土器



第26図 SD05b層 出土遺物1

供献土器と出土位置 c 層上面での出土、ほぼ完形、穿孔といった点を考慮して供献土器を認定した。いずれも胎土は褐色で細かな黒雲母を多量に含む。この胎土は、高松平野東端部に位置する久米池南遺跡や西浦谷遺跡の多数を占める同時期の土器と共通する。なお、角閃石の含有は微量で、後期初頭以降に高松平野で出現する香東川下流域產土器とは異なる。供献土器にはある程度まとまって出土する傾向があり、出土位置のまとめを A～I とした。区画溝の底面には凹凸があり、最深部から出土する土器もあるが(9)、多くは最深部に向かって降る緩やかな斜面からの出土である。1・3・4・9・10・11 は供献土器位置 A からの出土である。無頸壺 3、壺 4 は高松平野で例をみない。高さが低い壺 9 も同様である。3・4 には脇部穿孔と底部穿孔、9 には底部穿孔が認められる。台付鉢 11 も脚部と接続する底部に穿孔がある。壺底部 10 は穿孔の蓋然性が高いため供献土器とした。広口壺 1 は口縁部内面に近接する 2 個の円形浮文が施される。供献土器位置 B 出土の 2 は広口壺である。位置 C は壺 3 点(5～7)と、胴部最大径付近の横方向のヘラミガキが壺(7・9)と共通する壺 1 点である。組成が壺と壺に近い器種に限定されている。7 は 9 同様、5・6 に比べて器高が低いタイプである。5・6 は出土位置が近接し、サイズ、調整もよく似るが、別個体である。4 方向に透かしをもつ高杯 17 は位置 D から出土した。杯部の底部、円盤充填箇所を欠損するが、意図的かはわからない。区画墓 1・3 のコーナーに付近の位置 E からは 2 点の高杯 15・16 が出土した。15 の杯部は復元して図化したが、底部は円盤状にはがれています。16 の脚端部上面には刻み目が周回する。18・19 は位置 H からの出土である。いずれも杯部の底部に穿孔が認められる。19 の脚部には残存部分に 10箇所の透かしが施されており、復元すれば、透かしの数は 11 または 12 となる。位置 D・E・H では高杯のみが供献されている。F では完形の壺 14 が横置で出土した。胴部最大径と底部には外からの穿孔が認められる。位置 G から出土した壺 12 と高杯 13 は破片の状態で、礫の下位で検出した。特に 12 は多数の破片に分かれており、区画溝内で転落した礫によって割れた可能性もある。



第27図 SD05b層 出土遺物2